

令和3年度 放課後子ども総合プラン指導者等研修会（講座B） 報告

- 開催期日：令和3年10月15日（金）
- 開催場所：愛知県生涯学習推進センター
- 参加人数：会場参加者26名、オンライン参加者231名

<行政説明>

テーマ：「放課後子ども教室と放課後児童クラブの違い」

講師：愛知県教育委員会生涯学習課

本研修会は、「新・放課後子ども総合プラン」に基づいて行っています。新・放課後子ども総合プランとは、「全ての小学校区で、両事業（放課後子ども教室と放課後児童クラブ）を一体的に又は連携して実施し、うち小学校内で一体型として1万箇所以上で実施することを目指す」こと等を目標とした国の指針です。

行政説明では、「新・放課後子ども総合プラン」の趣旨を御理解いただくため、「放課後子ども教室と放課後児童クラブの違い」をテーマにして説明しました。両事業は、対象、運営者、活動内容、ねらいがそれぞれ異なります。それぞれの役割の違いを踏まえつつ、両事業の関係者が連携・協力して、「全ての児童が放課後を安全・安心に過ごし、多様な体験・活動を行うことができるようにする」体制づくりが求められていることを説明しました。

<講演>

演題：「子どもたちの人間関係はどのように形成されるのか」

講師：中部大学 教授 三島 浩路 氏

講義では、社会心理学・学校心理学・教育心理学を専門とする三島氏から、児童期における人間関係づくりの特色や、指導者としての関わり方について説明がされました。

児童期は、特定の友達と親密な人間関係を築き始める時期でもあります。しかしそれは、「仲間」と「仲間でない」という二分する関係を生み、仲間でない子や集団を遠ざける傾向が高まります。子供同士の名前の呼び方を観察すると、仲間であるかどうかによって、相手に対する呼び方を変えることが見受けられます。また、親密な関係を維持しようとするために、「疲れ」を感じている児童が一定数存在しているということなど、データをもとに児童期の人間関係の特色が説明されました。

そして、互いに協力し合わなければ解決できない課題を集団に提示することによって集団の良さが引き出されるという実験や、褒賞がある場合とない場合ではある方が集団の活用意欲を低下させたという実験、自信のある言葉と悲観的な言葉を指導者が投げた場合の課題達成率を測定した実験など、指導者の関わり方に参考となる事例が多数、紹介されました。



<参加者の声>

- 仲間集団の形成については感覚では理解していましたが、今回のように理論的に説明して理解する機会がなかったので、大変勉強になる良い機会となりました。
- 指導員の言葉の大切さを実感しました。自身の発する言葉や子供の話を受け止める姿勢を意識し、今後も子供と関わっていきたいと感じました。
- グループに属する安心感と共にその疲れもあることは経験上でも分かりますが、そういう観察データがあることに驚きました。気を付けて子供たちの関係性を見ていきつつ、違う子たちとの関わりを持てるような働きかけも意識的に行っていきたいと思えます。